世代をつなぐ同定検査
最新技術と変わらない技術

◎結城　万紀子[1)]
福岡大学病院[1)]

感染症診断において、培養・同定検査は一番の要であり、正しい同定結果を導き出さなければ、その先の薬剤感受性検査、また治療方法までもが誤った方向に進んでしまう。

正しい同定結果を導き出すためには、検査前プロセスである検体採取から検査実施までの工程で、我々検査技師の判断が必要になってくる。

検査室に届いた検体の量や品質が適切かどうか、目的菌を検出するために適切な培地や培養方法を選択しているか培養で病原菌を検出するための重要なポイントである。

また、昨今の微生物検査は迅速化が進んでおり、同定検査においても従来の自動分析装置に加えて MALDITOF-MS 法による質量分析装置、PCR 法や LAMP 法による遺伝子検査装置といった最新技術が普及してきている。しかしながら、自動機器による検査は必ずしも正しい結果を出すわけではない。それぞれの機器が持つ性質をよく理解した上で、結果を鵜呑みにせずに昔ながらの用手法や試験管培地による確認試験を行う事はこれからの時代も必要不可欠である。

今回、培養・同定検査において習得しておくべき知識や技術、起こりがちなピットホールについて事例も交えながら解説する。